

児童の自己決定・自己調整を促す学級経営の実践 ～ICTを活用した主体的な授業づくりと学級での活動を通して～

指宿市立丹波小学校

教諭 大迫 駿兵

<目次>

1	研究テーマの設定理由	2
(1)	時代的・教育的背景から	
(2)	第4期鹿児島県教育振興計画の方向性から	
(3)	授業づくりと学級経営を振り返って	
2	研究テーマの設定	2
3	研究の視点	2
4	研究の仮説	3
5	研究の実際	3
(1)	学級経営面での取組	
ア	学級目標の設定	3
イ	学級目標の振り返りと分析	3
ウ	学校生活を楽しく豊かにする係活動	4
エ	各係の取組の実際	4
オ	係活動発表予定表の作成	6
カ	自己決定型の宿題計画表	6
(2)	授業での取組	
ア	教科指導における自己決定を促す取組Ⅰ（算数科・社会科）	7
イ	教科指導における自己決定を促す取組Ⅱ（体育科 跳び箱運動）	7
ウ	教科指導における自己調整を促す取組Ⅰ（算数科・社会科）	8
エ	教科指導における自己調整を促す取組Ⅱ（体育科 跳び箱運動）	8
6	研究のまとめ	9
(1)	研究の成果	
(2)	研究の課題	

【参考文献】

- | | | |
|-----------------------|-------|-----------|
| ○ 『小学校学習指導要領解説 総則編』 | 平成29年 | 文部科学省 |
| ○ 『小学校学習指導要領解説 特別活動編』 | 平成29年 | 文部科学省 |
| ○ 『小学校学習指導要領解説 体育編』 | 平成29年 | 文部科学省 |
| ○ 『小学校学習指導要領解説 社会編』 | 平成29年 | 文部科学省 |
| ○ 『小学校学習指導要領解説 算数編』 | 平成29年 | 文部科学省 |
| ○ 『第4期鹿児島県教育振興基本計画』 | 令和6年 | 鹿児島県教育委員会 |

1 研究テーマの設定理由

(1) 時代的・教育的背景から

近年、社会は急速に変化し、AIの進展や情報化の加速によって未来を正確に予測することが難しい時代となっている。こうした社会では、自ら課題を見付け、判断し、学び続ける力が求められる。小学校学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現や自己の学習を振り返って次につなげる自己調整学習の充実や、情報活用能力の育成が示されていることから、学校教育では、児童が自ら考え、選択し、行動を調整できる力の育成がこれまで以上に重要となっている。また、1人1台端末の整備によって、意見の可視化や協働的な学習が日常的に可能となり、児童一人一人の学び方に応じた支援が期待されている。

(2) 第4期鹿児島県教育振興計画の方向性から

第4期鹿児島県教育振興計画では、基本目標と併せて、育成を目指す具体的人間像として、「知・徳・体の調和がとれ、主体的に考え行動する力を備え、未来の社会の創り手となる人間」が示されている。これらを実現するために、児童が自ら考え、判断し、行動を調整していく力を育成することが重要だと考える。その実現に向けたICTを活用した学級活動や学習は、児童が学び方や関わり方を自ら選択する場面をつくり、主体的な学びや自己決定・自己調整を促す有効な手立てであると考えられる。

(3) 授業づくりと学級経営を振り返って

自身の授業や学級経営を振り返ると、係活動や学級目標、宿題などの日常的な活動が、与えられたものとして形骸化し、児童が主体的に取り組むことができている様子が見られなかった。また、授業においても、教師主導で進むことが多く、児童が自ら学び方を選択したり、学習の進め方を調整したりする機会が十分に確保されていないという課題があった。

さらに、児童の考えを日々の学級経営や授業づくりに十分に反映できていないことや、ICTを効果的に活用して児童の学びを支える仕組みが十分でないことも課題として感じていた。

2 研究テーマの設定

こうした教育的背景や自身の課題を踏まえ、児童が自ら学級や学習をデザインできるような環境づくりを進める必要があると強く考え、以下のような研究テーマを設定した。

児童の自己決定・自己調整を促す学級経営の実践
～ICTを活用した主体的な授業づくりと学級での活動を通して～

3 研究の視点

本研究では、児童が主体的に学級や学習に関わるためには、日常的な学級での活動と授業の両面において「自分で選び、自分で調整する経験」を積み重ねることが重要であると考えられる。そこで、以下の3つの視点から実践を進め、児童の意識や姿を捉えていくこととする。

(1) 学級経営における自己決定・自己調整の促進

係活動、宿題計画、学級目標づくりなど、学級の基盤となる活動に児童の選択と意見を取り入れる仕組みをつくる。

(2) 授業づくりにおける自己決定・自己調整の促進

めあての設定、学習方法の選択、振り返りの可視化など、児童が学習の進め方を調整できる授業の仕組みを整える。

(3) ICT活用による考えの可視化、学びの蓄積と協働化

児童の意見を集約、思考の可視化や蓄積などタブレット端末を学級経営や授業改善に生かす。

4 研究の仮説

児童が学級や学習の中で、自分で行うことを選択し、振り返って改善する経験を積み重ねられるようにするとともに、ICTで意見や自他の学びの様子が見えるようにすることで、児童の自己決定力・自己調整力が高まり、主体的に学級の活動や授業に参加する姿が見られるのではないだろうか。

5 研究の実際

(1) 学級経営面での取組

ア 学級目標の設定

学級目標は年度初めに決める学級が多いが、その際、どうしても自分の意見を積極的に言える児童が中心となって決まってしまうという課題があった。そこで、本研究では、ロイロノートの提出箱を活用し、**図1**のように全児童の考えを漏れなく集約できる仕組みを取り入れた。児童一人一人が個別に意見を書き込めるため、普段あまり発言しない児童の意見も確実に拾い上げることができた。



【図1】児童の意見を集約した提出箱

提出された意見は全体に共有し、どのような学級を目指したいかについて、共通点や大事にしたい価値を確認しながら、児童と一緒に話し合いを進めていった。全体に可視化された意見を基に話し合うことで、これまで意見が通りにくかった児童の意見も自然と議論に取り入れられ、より公平で納得感のある学級目標づくりへとつながった。

その後、「設定した学級目標を実現するためには、どんな行動が必要か」まで具体的に考える時間を設けた。児童一人一人が自分たちの言葉で具体策を出し合い、全員で共有することで、目標が、「掲げるだけの言葉」ではなく、「日々の行動と結びついたもの」として位置付けられるようにした**(図2)**。



【図2】学級目標と具体策

話し合っただけの学級目標と具体策は、いつでも振り返ることができるように教室後方へ掲示した。このことが、児童が日常の中で自然と目標を意識し、自ら考えて行動しようとする姿勢につながった。

イ 学級目標の振り返りと分析

学級目標やその具体策について、学期末にGoogleフォームのアンケート機能を用いた振り返りを行い、児童の感じている成果や課題をデータとして集約した**(図3)**。回答結果は数値化や記述の分析を行い、児童の実感や学級全体の傾向を把握した。

得られた結果は学級PTAで保護者と共有し、学級の現状と取組の成果、見えてきた課題を率直に説明した。また、その分析をもとに、次学期の学級経営の方向性を示すことで、学校と家庭が共通理解をもって児童の成長を支えていけるようにした**(図4)**。



【図3】Google フォームアンケート

1 学期の反省				
(1) 学習面について				
項目	できた	まあまあできた	あまりできなかった	できなかった
チャイム前着席・静かに待つ	23.3%	63.3%	13.3%	0.0%
話を聞く態度	76.7%	20.0%	3.3%	0.0%
期間への粘り強さ	66.7%	30.0%	3.3%	0.0%
宿題の計画・実行	71.4%	17.9%	10.7%	0.0%
タブレットによる学習意欲	90.0%	6.7%	3.3%	0.0%
ICTの正しい使い方の意識	93.3%	6.7%	0.0%	0.0%

・ ICT活用面：非常に高い意識と行動力(90%以上が「できた」)。この分野は既に定着傾向にあり、次は活用の質を高める段階だと思います。

・ 学習姿勢全般：話の聞き方や粘り強さも好評です。(70%以上が「できた」または「まあまあ」)。

・ 生活習慣：「チャイム前着席」がやや弱いです。「(「できた」23.3%、最多が「まあまあ」)。日常的なルールの自覚をさらに育てたいです。

・ 家庭学習の習慣化：宿題の自己管理はやや個人差が大きいです。支援と動機付けが必要だと考えています。

【2 学期に向けた学級経営の方向性】

- 生活習慣の定着
「チャイム前に静かに着席することや、「めあてをもって学習に向かう姿勢」を引き続き意識付け、学習の土台をしっかりと築いていきます。
- 人間関係の充実と主体的な行動の促進
「ありがとう」や「やさしい言葉」を意識した声掛けや、係活動で自分のアイデアを生かせるような工夫(アイデアの発表や振り返りの時間)を取り入れています。
- ICT活用の質を高める
タブレット端末の使用は「調べて終わり」ではなく、まとめた発信したりする力へとつなげていきます。
- 運動・生活面の習慣化と協働意識の向上
体育行事や長縄練習などを通して、友達と声を掛け合いながら目標に向かって取り組む姿勢を育てていきます。また、給食では「自分で決めた量を食べること」や「マナーを守って気持ちよく食べること」など、日常生活の中で自律した行動がとれるよう指導を継続していきます。

【図4】アンケート結果を示したPTA資料の一部抜粋

ウ 学校生活を楽しく豊かにする係活動

小学校学習指導要領解説特別活動編に示されている学級活動(1)「イ 学級内の組織づくりや役割の自覚」によると、学級生活の充実や向上のために、「児童が主体的に組織をつくり、役割を自覚しながら仕事を分担して、協力し合い実践すること」が求められている。

また、この内容では、係活動などの学級内の組織について、教師が一方向的に与えるのではなく、児童自身が学級をよりよくするために必要な係を見だし、話し合いを通して合意形成を図りながら組織をつくっていくことが重要であるとされている。さらに、それらの活動を通して、自分の役割や責任を自覚し、他者と協力しながらよりよい学級生活を築こうとする態度の育成が期待されている。

そこで本研究では、係活動を単なる当番的な役割分担として扱うのではなく、「学級を楽しく、豊かにするために、どのような係が必要か」ということについて児童自身が考え、話し合い、決定するようにした。児童が自ら係の内容を考え、選択し、役割を担って実践することで、楽しく豊かな学校生活につながる係活動を目指した。

エ 各係の取組の実際

(ア) マンガ・アニメーション係

給食時間に、ロイロノートを活用して自作したパラパラ漫画や簡単なアニメーションを発表した(図5)。また、活動内容を知らせるためにポスターを作成し、事前に告知を行った(図6)。どうしたらみんなに楽しんでもらえるかを考えながら作品を工夫し、発表に向けて主体的に準備する姿が見られた。



【図5】給食時間でのパラパラ漫画発表会



【図6】タブレット端末で作った告知ポスター

(イ) クイズ・なぞなぞ係

誰でも気軽に参加できるように、教室になぞなぞコーナーを設置した(図7)。また、ロイロノートのアンケート機能を使って、出してほしいクイズのテーマを募集し、その結果を基に給食時間にクイズを発表した(図8)。友達の見解を取り入れながら内容を考え、学級全体を巻き込んだ活動へと発展させる様子が見られた。



【図7】なぞなぞコーナー



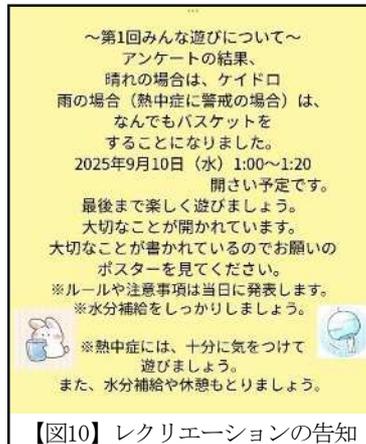
【図8】クイズアンケート

(ウ) レクリエーション係

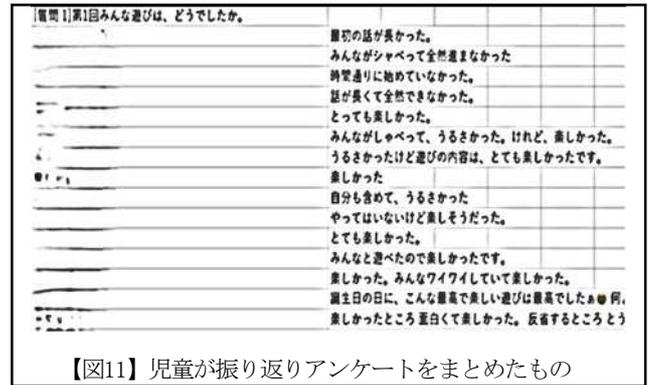
昼休みに行く遊びについて、ロイロノートのアンケート機能を用いて希望を募り、結果を基に遊びを企画した。活動前には自作のポスターで告知を行うとともに(図10)、活動後に振り返りアンケートを実施し、次の遊びに生かした(図9・11)。遊びを「やって終わり」にせず、振り返りを通して改善しようとする姿が見られ、自己調整的に活動を進める力につながった。



【図9】レクリエーションの説明をしている様子



【図10】レクリエーションの告知



【図11】児童が振り返りアンケートをまとめたもの

(エ) 折り紙係

タブレット端末を活用して季節に合った折り紙の作品を調べ、実際に制作した。完成した作品は教室内に掲示し、学級の雰囲気づくりに生かした(図12)。季節感を意識しながら作品を選び、学級環境を整えようとする意識が高まった。



【図12】折り紙をつるした飾り付け

(オ) お誕生日係

お誕生日掲示板を作成し、給食時には牛乳での乾杯やバースデーソングを歌う企画を行った(図13・14)。また、心を込めたバースデーカードを作成し、該当児童にプレゼントした。友達の誕生日を大切に、互いを思いやる温かい学級の雰囲気づくりにつながった。



【図13】給食時間にバースデーソングを歌う様子



【図14】お誕生日コーナー

(カ) イラスト係

描いてほしいイラストを掲示板やロイロノートのアンケート機能で募集し、完成した作品を教室に掲示した(図15)。特に好評だったイラストは、月末に希望者へプレゼントした(図16)。友達の要望に応えようと工夫しながら制作する姿が見られ、学級への貢献意識が高まった。



【図15】ロイロノートで作成したアンケート



【図16】帰りの会でのイラストプレゼント

オ 係活動発表予定表の作成

係活動の発表は、給食時間や帰りの会の合間を活用して行ってきたが、同じ日に複数の係の発表が重なるという課題が見られた。この点については、学期末の振り返りにおいても、児童から、「発表が重なって分かりにくい。」といった意見が多く挙げられた。そこで、係活動の進め方について児童と話し合う時間を設けたところ、「発表が重ならないように計画表を作るとよい。」という意見にまとまった。話し合いを基に、教室前方のホワイトボードの一部を活用して係活動発表予定表を作成し、いつでも確認できるようにした(図17)。



【図17】係活動予定表

この取組により、発表の見通しをもって準備に取り組む姿が見られるようになり、児童が活動を振り返り、改善策を考えて実行する自己調整の姿につながった。

カ 自己決定型の宿題計画表

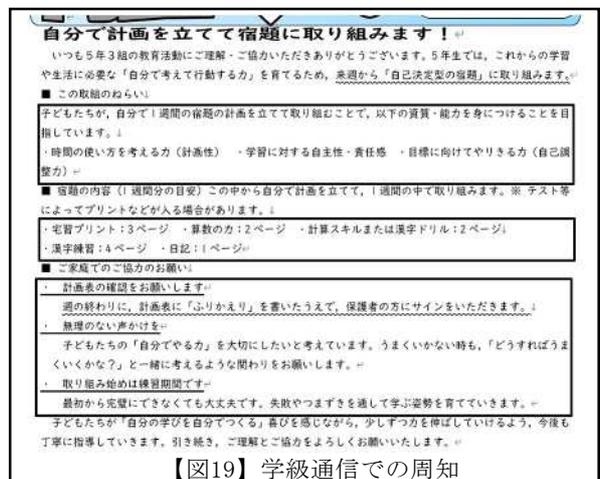
今までの宿題は、教師が内容や量を一律に提示する教師主導型であり、児童にとって「やらされている」という意識が生じやすいという課題があった。

そこで本研究では、自己決定型宿題計画表を作成し、宿題の進め方を児童自身が計画できるようにした(図18)。月曜日に一週間分の宿題内容を提示し、その範囲内で「いつ・どれくらい取り組むか」を児童が自分で決定した。取組後は、毎日の学習について◎・○・△で自己評価による振り返りを行い、週末には一週間の取組を記述式で振り返った。計画表の配布・回収はタブレット端末を用いて行い、教師と児童がいつでも内容を確認できるようにした。

その結果、生活リズムに応じて学習量を調整しながら取り組む姿が見られ、宿題への主体的な関わりと自己調整的な学習態度の育成につながった。また、この取組については学級通信や個人面談等を通して保護者と共有し、家庭との連携を図った(図19)。



【図18】自己決定型宿題計画表



【図19】学級通信での周知

(2) 授業での取組

ア 教科指導における自己決定を促す取組Ⅰ（算数科・社会科）

算数科や社会科の学習では、児童が主体的に学びを進められるよう、学習方法や学習形態を自己決定する時間を設定した。具体的には、ノートやロイロノートによるまとめ方、1人で学ぶか友達と学ぶか、教師に相談しながら進めるかといった学習形態、教科書やインターネットなどの学習資料、教室やオープンスペースといった学ぶ場についても、児童自身が選択できるようにした(図20・21・23)。また、課題を終えた児童に「フリー学習」の時間を設け、類似単元のNHK for Schoolの視聴、インターネットを用いた追加調べ学習やまとめ、eライブラリー（デジタルドリル）への取組などを用意し、興味・関心に応じて学習内容を自己決定できるようにした(図22)。



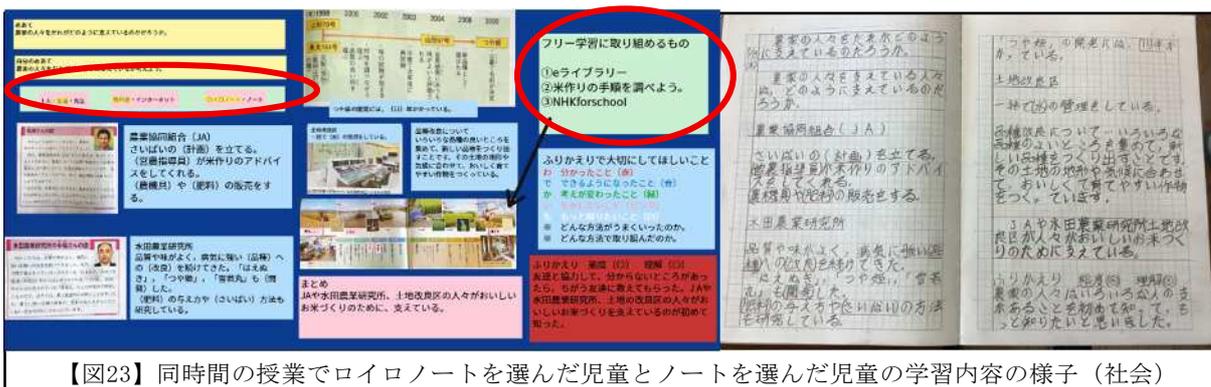
【図20】ノートやロイロノートで学習する姿（社会）



【図21】様々な学習形態で学ぶ様子（算数）



【図22】フリー学習に取り組む様子（算数）



【図23】同時間の授業でロイロノートを選んだ児童とノートを選んだ児童の学習内容の様子（社会）

イ 教科指導における自己決定を促す取組Ⅱ（体育科 跳び箱運動）

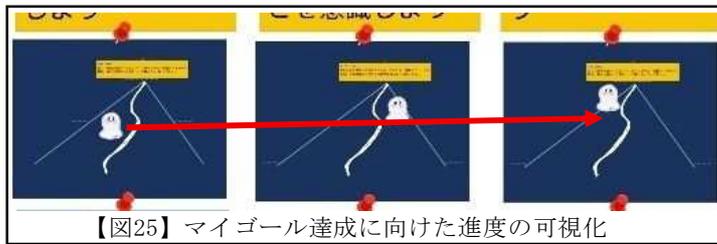
体育科の跳び箱運動では、児童が自分の技能の実態に応じて学習を進められるよう、「マイゴール（単元のめあて）」の設定を中心とした取組を行った。自分にとってのマイゴールを設定するとともに、各時間の授業のめあてに対しても、個人のめあてを考える時間を設けた。ロイロノートでワークシートを作成し、いつでも確認できるようにした(図24)。

また、マイゴールの達成に向けて、どのような練習に取り組むか、児童自身が練習計画を立てるようにした。練習内容や順序、取り組む場を自分で選択することで、目的意識をもって活動に取り組めるようにした(図25)。

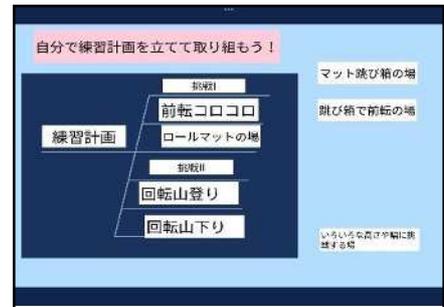
さらに、マイゴールへの到達度を実感できるよう、進度を「山登り形式」で可視化した。段階的に設定された目標を一つずつ達成していくことで、児童は自分の成長を実感しながら学習を進め、意欲的に練習に取り組む姿が見られた(図26)。

時間	1	2	3・4・5	6	
全体のめあて	学習の進め方を知ろう。	台の上で安定して回るにはどうしたらよいか。	自分の課題をもとに技の練習に取り組もう。	跳び箱発表会をしよう。	
自分のめあて	学習の進め方を知って、協力しよう。	友達と協力して安定して台の上を回れるようにする。	台の上でまっすぐ回ることを挑戦する。	跳び箱で前転を挑戦する。	きれいに回れるようにする。
練習計画					
振り返り					

【図24】跳び箱運動で使用したワークシート



【図25】マイゴール達成に向けた進捗の可視化



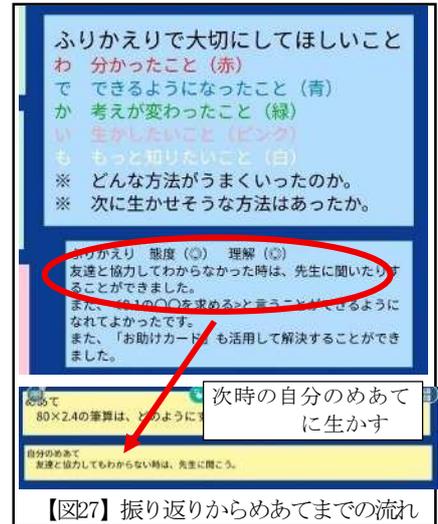
【図26】自分で立てた練習計画

ウ 教科指導における自己調整を促す取組I(算数科・社会科)

算数科や社会科の学習においては、振り返りを次時の学習へとつなげることで、自己調整を促す取組を行った。

「いぶすき授業ポイント5」の振り返りの視点を基に、「どのような方法で学ぶとうまくいったのか、どのような点がうまくいかなかったのか」等を児童自身が振り返る時間を設けた。振り返りは継続的に行い、学習方法や取組の工夫を蓄積した。その内容を次時のめあての設定に反映させることで、児童が前時の学びを生かしながら、自分に合った学び方を調整しながら学習に取り組めるようにした(図27)。

このように、振り返り→めあて設定→自力解決という学習の流れを意識させることで、児童が見通しをもって学び続ける姿勢の育成を図った。



【図27】振り返りからめあてまでの流れ

エ 教科指導における自己調整を促す取組II(体育科 跳び箱運動)

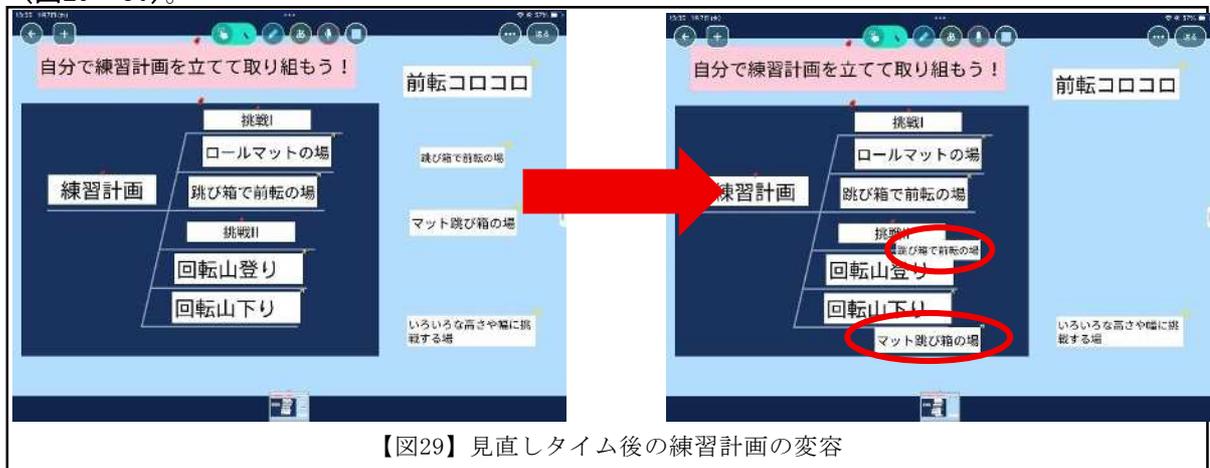
体育科の跳び箱運動では、主運動に取り組む「挑戦I」と「挑戦II」の間に、練習計画を見直す時間を設定した。挑戦Iでの自分の動きや達成状況を基に練習内容や方法を調整し、より自分に合った練習に取り組めるようにした。

また、学習の最後には振り返りの時間を設定し、自身の取組を振り返らせた。その振り返りを基に、次時の学習に向けた練習計画を立てることで、見通しをもって学習に臨めるようにした(図28)。

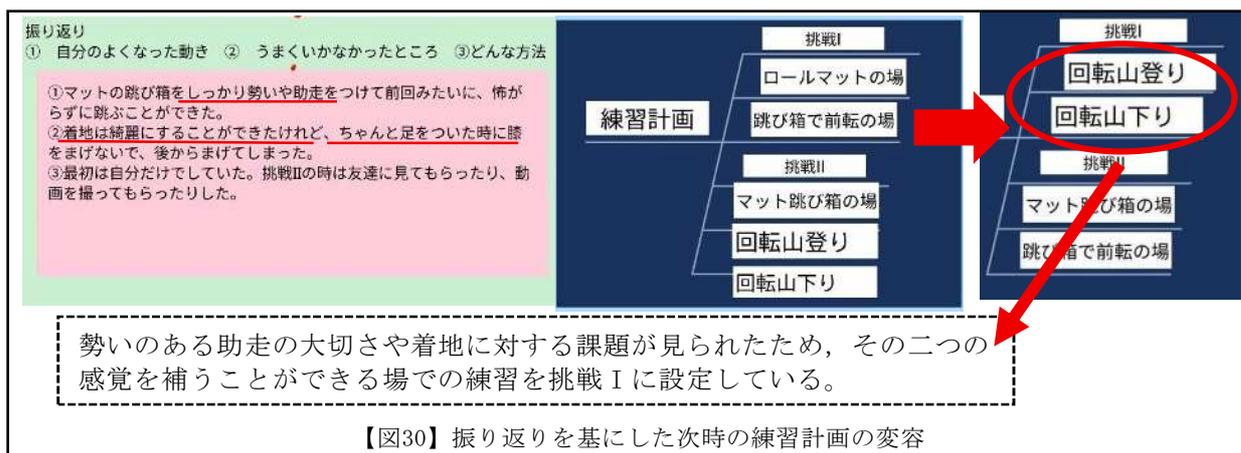
これにより、児童は自分の課題や技能の習得状況に応じて練習を改善しながら運動に取り組み、主体的に技能向上を目指す姿が見られるようになった(図29・30)。



【図28】跳び箱運動における学習計画

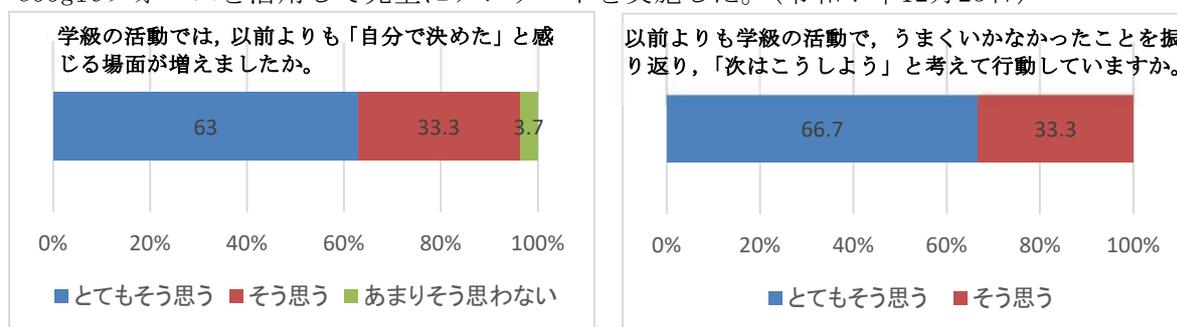


【図29】見直しタイム後の練習計画の変容

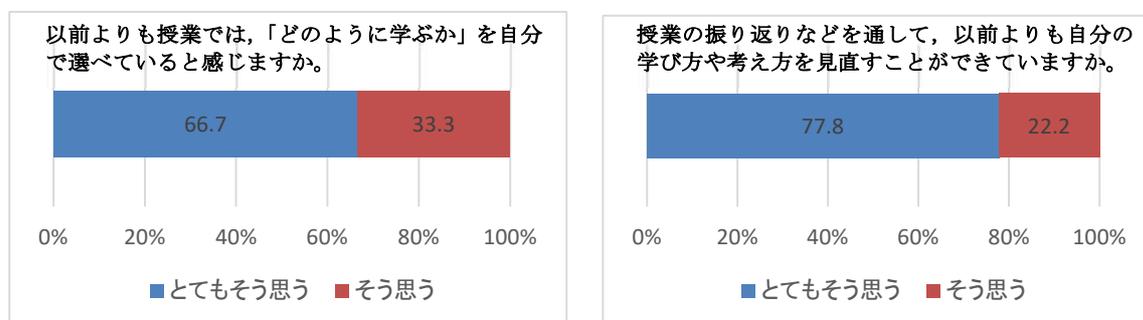


6 研究のまとめ

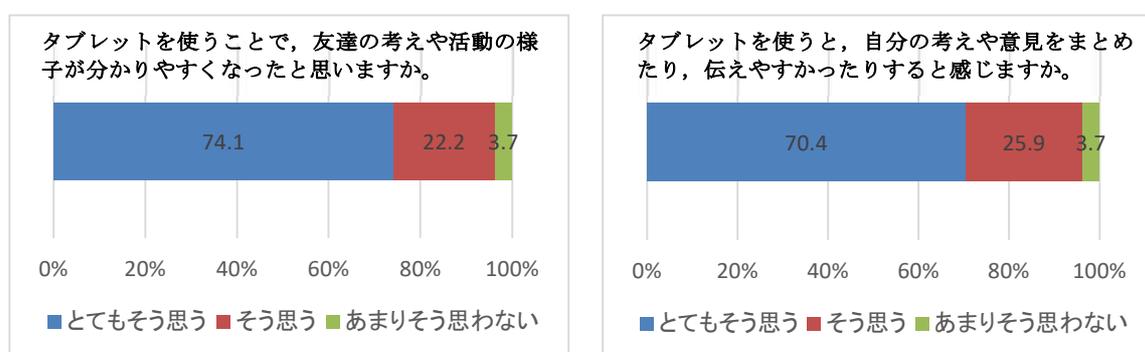
Googleフォームを活用して児童にアンケートを実施した。(令和7年12月23日)



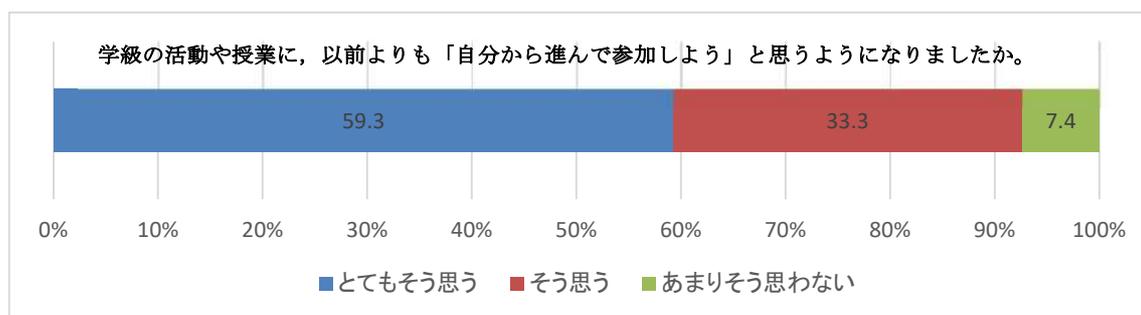
【図31】 学級の活動における自己決定・自己調整の意識調査



【図32】 授業における自己決定・自己調整の意識調査



【図33】 ICTの活用についての意識調査



【図34】主体的な態度についての意識調査

(1) 研究の成果

本研究を通して、学級活動や授業において、自分で学び方や行動を選択することに関する児童の意識が高まったことが分かる。

アンケート結果では、学級の活動や授業での意思決定、振り返りを次の行動につなげること、学び方の見直しといった項目において、肯定的に捉えている児童が90%以上、もしくは100%となった(図31～図33)。また、学級の活動や授業への主体的な参加の項目についても肯定的に捉えている児童が92.6%となった(図34)。

このことから、児童の自己決定力や自己調整力の高まりが、学級の活動や授業に主体的に参加する態度の育成に一定の効果をもたらしたといえる。

(2) 研究の課題

一方で、学級の活動に対する自己決定や主体的な参加の実感については、少数ながら「あまりそう思わない」と回答している児童もいることが分かった(図31・34)。

自己決定や自己調整の機会を与えるだけでは十分でなく、個々の実態を見ながら、その都度、適切な支援をしていくことが今後の課題である。また、ICT活用についても、活用の効果を実感しにくい児童への配慮が必要であり、全ての児童が主体的に参加できるような手立てを工夫し、継続していく必要がある。